

女子大学生の遅刻に関する研究

—遅刻者の状況と意識, 並びに性格的特徴と学校適応感について—

金子智栄子・小暮由紀子*

Key Words : female university students, tardiness, personality, school adaptability

【問題と目的】

学校生活や社会生活を円滑に過ごすためには、「時間を守る」ということは重要なことである。ただし、遅刻は情緒的に不安定になって自分を責めながらもどうしようもなくしてしまう場合と、規律を守れないルーズな性格の行動特徴から罪悪感も少ないまま惰性的になってしまう場合があると考えられる。

確かに、人は情緒的に不安定になると自己を統制することができなくなり、決められた時間に則して行動することができにくくなる。遅刻は、学習意欲や参加意欲の低下に伴って生じてくることが多く、不登校や無気力などの不適応行動の前兆となることもある。このような状況は、巽（1999）の例に示されるように、学校の心理臨床場面ではよく見受けられることである。

近年、小学校から高等学校だけでなく、大学の授業においても遅刻は問題視されており、しつけの不足や、社会規範に対する意識の低下などが原因と考えられている。道城ら（2002）は、大学の授業で遅刻者数を黒板に発表して遅刻をしないように注意したり、遅刻をすると減点して成績を下げたりしたところ、遅刻者が減少したことを報告している。大学であっても遅刻の対応に苦慮し、さまざまな工夫をしている教員も多いと予想される。

授業ばかりでなく、友人との待ち合わせにおいても遅刻を常習とする者もいる。遅刻を常習

A study on female college students' tardiness

—How tardy students perceive their tardiness and the possible association of these perceptions with personality and school adaptability—

*Chieko Kaneko・Yukiko Kogure

Correspondence Address: Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,
1196 Kamekubo, Fujimino-Shi, Saitama 356-8533, Japan

Accepted November 28, 2005. Published December 20, 2005.

とする者には、性格的特徴に共通点があるように見受けられるが、一方で、遅刻が許されやすい環境にいるのかもしれない。学生の遅刻に関しては、専門学校の保育者志望の学生において遅刻の回数が多い者は少ない者と比べて幼稚園教育実習の総合評価が悪い（伊谷ら、1994）、大学の吹奏楽部、洋弓部、野球部において成績が下位のチームは遅刻が多い（佐々木、1995 ab）という研究がある。その他、大学の実験の授業における遅刻や欠席の状況と天候・気候との関係を調べた研究（清水ら、1974,1975）はあるが、その数は少ない。実際に、大学生の遅刻の現状や理由、遅刻者の性格特徴などを組織的、論理的に研究した論文は見あたらないようである。そこで本研究では本学の女子学生を対象に、遅刻の状況とそれに対する意識を調べ、性格的特徴や大学への適応との関連性を検討することにした。

【方 法】

1. 調査期間：平成16年7月

2. 調査対象：本学女子学生61名。主に2年次の学生だった。

3. 調査内容：まず、筆者らは4年次女子大生10名と討議して、質問項目を作成した。

1) 遅刻の状況

「授業」と「友人との待ち合わせ」別に、遅刻の程度を「よくする(4)、時々する(3)、あまりしない(2)、絶対しない(1)」の4段階で評定させた。授業は1時限目から始まる授業が週5日あった場合の遅刻日数、待ち合わせは5回待ち合わせた場合の遅刻回数を回答させ、いずれも遅刻時間を記入させた。

遅刻の理由は、授業については「寝坊」「時間の逆算が甘い」「必修の授業ではない」「授業がつまらない」「先生が遅刻に厳しくない」「授業が始まるまで教室で待っているのがいや」「出かける直前に何か他の用事を始めてしまう」の7項目、待ち合わせについては「寝坊」「時間の逆算が甘い」「自分が待ちたくない」「時間や場所を間違えやすい」「相手が遅刻にうるさくない」「相手が自分にとって重要な人物ではない」「相手にあまり会いたくない」の8項目を列挙し、該当する順に3位まで番号をつけさせた。

2) 遅刻についての意識と対応

待ち合わせに遅刻した時間を15分と1時間に分けて、“ちょっとした”遅刻と“大幅な”遅刻とに区分した。そして、相手が遅刻した場合の自分の行動について、「気にせず待つ」「仕方がなく待つが不機嫌」「帰る」から1項目を選択させた。また、自分が遅刻した場合の罪悪感の程度を「大変感じる(6)、感じる(5)、やや感じる(4)、あまり感じない(3)、感じない(2)、全然感じない(1)」の6段階で評定させた。さらに、自分や相手の遅刻について、その許容度を「絶対に許せない」「理由があれば許せる」「人間だからある程度仕方がない」から1項目を

選択させた。

3) 性格的特徴と学校適応感について

東大式エゴグラムからACを5項目、CP・NP・FCを各々6項目、Aを7項目計30項目を選択した(項目内容は表7を参照)。学校適応感尺度(高橋ら, 1986)から友人関係と規則への態度を各々5項目、学習意欲と進路意識を各々6項目計22項目選択した(項目内容は表9参照)。評定は4段階「あてはまる(4)、少しあてはまる(3)、あまりあてはまらない(2)、あてはまらない(1)」を用いた。

【結 果】

1. 遅刻の状況

遅刻の理由は1位から3位の順に3から1を配点した。ただし、順位をつけずに選択されていた場合は1点を与えた。表1に「授業」と「友だちとの待ち合わせ」別に遅刻の状況を示した。

1) 授業について

表1より、遅刻を「よくする」者は3人(61人中4.9%)で、遅刻日数の平均は5日中3.0日で、平均遅刻時間は35.0分である。遅刻理由の得点が高い上位3位までの項目は、「寝坊」が7点(3人)で、「時間の逆算が甘い」「先生が遅刻に厳しくない」「出かける直前に用事を始めてしまう」が各々2点(1人)であった。

「時々する」者は13人(21.3%)で、平均遅刻日数は1.6日、平均遅刻時間は16.1分で、理由は「寝坊/21点(9人)」「時間の逆算が甘い/15点(7人)」「先生が遅刻に厳しくない/7点(5人)」「出かける直前に用事を始めてしまう/7点(3人)」であった。

「あまりしない」者は19人(31.1%)で、平均遅刻日数は0.5日で、平均遅刻時間は9.6分である。理由は、「寝坊/28点(13人)」「必修の授業ではない/15点(8人)」「時間の逆算が甘い/14点(7人)」であった。

「絶対にしない」者は26人(42.6%)だった。

2) 友だちとの待ち合わせについて

表1より、遅刻を「よくする」者は5人(61人中8.2%)で、遅刻回数の平均は5回中3.6回で、平均遅刻時間は18.0分である。理由の上位3位までの項目は「時間の逆算が甘い/12点(5人)」「相手が遅刻にうるさくない/7点(4人)」「自分が待ちたくない/4点(3人)」「時間や場所を間違えやすい/4点(2人)」であった。「時々する」者は21人(34.4%)で、平均遅刻回数は1.7回で、平均遅刻時間は9.0分である。理由は「時間の逆算が甘い/36点(17人)」「寝

坊/24点（11人）」「出かける直前に用事を始めてしまう/17点（10人）」であった。「あまりしない」者は24人（39.3%）で、平均遅刻回数は1.1回、平均遅刻時間は7.1分で、理由は「時間の逆算が甘い/36点（17人）」「寝坊/24点（12人）」「出かける直前に用事を始めてしまう/16点（10人）」であった。「絶対しない」者は11人（18.0%）だった。

表1 遅刻の状況

状況		遅刻			
		よくする	時々する	あまりしない	絶対しない
授業		3人 4.92%	13人 21.31%	19人 31.15%	26人 42.62%
		16人 26.23%		45人 73.77%	
友だちとの待ち合わせ		5人 8.20%	21人 34.42%	24人 39.34%	11人 18.03%
		26人 42.62%		35人 57.38%	
平均遅刻日数	授業	3.0日	1.6日	0.5日	
	待ち合わせ	3.6回	1.7回	1.1回	
平均遅刻時間	授業	35.0分	16.1分	9.6分	
	待ち合わせ	18.0分	9.0分	7.1分	
遅刻理由 上位3位まで	授業 1位	寝坊(7点3人)	寝坊(21点9人)	寝坊(28点13人)	
	2位	時間の逆算が甘い(2点1人) 先生が遅刻に厳しくない(2点1人) 出かける直前に何か用事を始めてしまう(2点1人)	時間の逆算が甘い(15点7人)	必修の授業でない(15点8人) 時間の逆算が甘い(15点7人)	
	3位		先生が遅刻に厳しくない(7点5人) 出かける直前に何か用事を始めてしまう(7点3人)		
待ち合わせ	1位	時間の逆算が甘い(12点5人)	時間の逆算が甘い(36点17人)	時間の逆算が甘い(36点17人)	
	2位	相手が遅刻にうるさくない(7点4人)	寝坊(24点11人)	寝坊(24点12人)	
	3位	自分が待ちたく	出かける直前に	出かける直前に	

	ない(4点3人) 時間や場所を間違えやすい (4点2人)	何か用事を始めてしまう(17点10人)	何か用事を始めてしまう(16点10人)	/
--	------------------------------------	---------------------	---------------------	---

遅刻理由 授業：1 寝坊, 2 時間の逆算が甘い, 3 必修の授業ではない, 4 授業がつまらない, 5 先生が遅刻に厳しくない, 6 授業が始まるまで教室でまっているのがいや, 7 出かける直前に何か他の用事を始めてしまう, 待ち合わせ：1 寝坊, 2 時間の逆算が甘い, 3 自分が待ちたくない, 4 時間や場所を間違えやすい, 5 出かける直前に何か他の用事を始めてしまう, 6 相手が遅刻にうるさくない, 7 相手が自分にとって重要な人物ではない, 8 相手にあまり会いたくない

2. 遅刻についての意識や対応

授業と待ち合わせの両方で、遅刻を「よくする」「時々する」と評定した者を遅刻群（13人, 21.3%）とし、「あまりしない」「絶対にしない」と評定した者を非遅刻群（32人, 52.5%）とした（表2参照）。

表2 授業×待ち合わせの遅刻の程度

授業の遅刻 待ち合わせの遅刻	よくする	時々する	あまりしない	絶対にしない
よくする	1人 1.64%	2人 3.28%	0人 0.00%	0人 0.00%
時々する	2人 3.28%	8人 13.11%	2人 3.28%	1人 1.64%
あまりしない	0人 0.00%	9人 14.75%	7人 11.48%	3人 4.92%
絶対にしない	2人 3.28%	2人 3.28%	15人 24.59%	7人 11.48%

1) 自分が遅刻した時の罪悪感

表3に「15分」と「1時間」の遅刻別に、自分が遅刻した時の罪悪感の程度について人数と%, 平均値とその差の検定結果を示した。

1時間相手を待たせた場合は、2群とも全員が強い罪悪感を持っていた。15分の遅刻でも罪悪感を持っていたが、遅刻群がM4.40 (SD.86) で、非遅刻群がM5.35 (SD.67) で、t検定の結果 $p < .01$ で遅刻群の方が低かった。

表3 自分が遅刻した時の罪悪感

罪悪感		遅刻群 (13人)	非遅刻群 (32人)	
15分遅刻	大変感じる	4人 30.77%	22人 68.75%	χ^2 検定 n s
	感じる	4人 30.77%	7人 21.88%	
	やや感じる	5人 38.46%	3人 9.38%	
		M: 4.40 SD: .86	M: 5.35 SD: .67	t検定 $p < .01$
1時間遅刻	大変感じる	13人 100.00%	32人 100.00%	

2) 相手が遅刻した時の対応

表4に「15分」と「1時間」の遅刻別に、相手が遅刻した時の態度や対応について人数と％、 χ^2 検定の結果を示す。

15分の遅刻では、遅刻群の12人（92.3％）、非遅刻群の28人（87.5％）が「気にせず待つ」としている。1時間の遅刻では、遅刻群が「気にせず待つ」と「待つが不機嫌」が各々6人（46.2％）で、「帰る」が1人（7.7％）である。非遅刻群は12人（37.5％）、18人（56.3％）、2人（6.3％）で、 χ^2 検定の結果は両群間に有意差はなかった。

表4 相手が遅刻した時の対応

対応		遅刻群（13人）		非遅刻群（32人）		χ^2 検定
15分待つ場合	気にせず待つ	12人	92.31%	28人	87.50%	n s
	待つが不機嫌	1人	7.69%	4人	12.50%	
	帰る	0人	0.00%	0人	0.00%	
1時間待つ場合	気にせず待つ	6人	46.15%	12人	37.50%	n s
	待つが不機嫌	6人	46.15%	18人	56.25%	
	帰る	1人	7.69%	2人	6.25%	

3) 遅刻の許容度

表5に自分と相手の遅刻別に、許容度について人数と％、 χ^2 検定の結果を示した。

自分の遅刻については、遅刻群は「人間だからある程度仕方がない」が7人（53.9％）で多く、非遅刻群は「理由があれば許せる」が19人（59.4％）で最も多く、 χ^2 検定の結果は $p < .01$ で有意となっていた。遅刻群は自分の遅刻について許容しやすいことがわかる。

相手の遅刻については、「理由があれば許せる」「人間だからある程度仕方がない」が、遅刻群が5人（38.5％）、8人（61.5％）、非遅刻群は19人（59.4％）、13人（40.6％）で、 χ^2 検定の結果は有意差がなかった。

表5 遅刻の許容度

許容度		遅刻群（13人）		非遅刻群（32人）		χ^2 検定
自分の遅刻	絶対に許せない	2人	15.38%	10人	31.25%	$p < .01$
	理由があれば許せる	4人	30.77%	19人	59.38%	
	人間だからある程度仕方がない	7人	53.85%	3人	9.38%	
相手の遅刻	理由があれば許せる	5人	38.46%	19人	59.38%	n s
	人間だからある程度仕方がない	8人	61.54%	13人	40.63%	

3. 性格的特徴と遅刻との関連性

授業場面と待ち合わせ場面の遅刻の程度と、エゴグラム の尺度とのピアソンの相関係数を算出したところ (表6 参照), 授業場面の遅刻のみがNPと $p < .10$ で負の相関 ($r = -.24$) があつた。

遅刻群と非遅刻群間でt検定を行ったところ尺度においては有意差はなかつた (表7 参照)。項目においては「頑固で融通がきかない/遅刻群 (M2.92, SD.76) > 非遅刻群 (M2.28, SD.81)」「わがままである/遅刻群 (M3.54, SD.66) > 非遅刻群 (M2.84, SD.88)」が $p < .05$ で遅刻群が高く。「思いやりの気持ちが強い/遅刻群 (M2.46, SD.78) < 非遅刻群 (M2.94, SD.67)」「人に対して穏和で寛大である/遅刻群 (M2.08, SD.86) < 非遅刻群 (M2.66, SD.65)」「他人の顔色をうかがってしまう/遅刻群 (M2.77, SD1.01) < 非遅刻群 (M3.34, SD.75)」が非遅刻群が高かつた。

表6 エゴグラム×遅刻

エゴグラム \ 遅刻	CP	NP	A	FC	AC
授業	.19	-.24 ⁺	.17	.17	-.10
待ち合わせ	.08	.11	.15	.08	-.18

⁺... $p < .10$

表7 エゴグラムの遅刻群と非遅刻群間の平均値と標準偏差

エゴグラムの項目	遅刻群 (N=13)		非遅刻群 (N=32)		
	M	SD	M	SD	
CP	2.25	.54	2.58	.62	
頑固で融通がきかない。	2.92	.76	> 2.28	.81	*
他人の長所よりも欠点が目につく。	2.23	.93	2.19	.78	
礼儀, 作法, 習慣を重んじる。	2.85	.80	2.81	.74	
相手の不正や失敗に厳しい。	2.54	1.05	2.19	.86	
物事をはっきりさせないと気がすまない。	2.77	.93	2.74	.89	
物事に批判的である。	2.69	1.03	2.25	.80	
NP	2.82	.46	2.64	.49	
困っている人を見るとつい手助けしたくなる。	3.00	.82	3.00	.67	
思いやりの気持ちが強い。	2.46	.78	< 2.94	.67	*
他人の面倒をよく見る。	2.69	.85	2.94	.67	
人に対して穏和で寛大である。	2.08	.86	< 2.66	.65	*
おせっかいをしてしまう。	2.30	.75	2.47	.76	
人の長所に気づきほめる。	2.77	.73	2.56	.88	
A	2.37	.49	2.57	.44	
人の行動を客観的に観察する。	3.15	.69	2.84	.81	

自分の損得を考えてから行動する。	2.54	.88	2.26	.77
何事も事実に基づいて判断する。	2.69	.75	2.28	.85
計画を立ててから実行する。	2.46	1.05	2.53	.98
わかりやすく物事を表現する。	2.38	.87	2.06	.72
物事をうまくまとめる。	2.08	.76	2.38	.79
疑問の点を明らかにする。	2.69	.75	2.31	.82
FC	2.68	.54	2.69	.58
気分の変化が激しい。	3.38	.77	3.06	.10
言いたいことを遠慮なく言ってしまう。	2.62	.96	2.31	1.03
あけっぴろげで自由である。	2.46	.88	2.47	.84
冗談を言ったり軽口をたたくのがうまい。	2.69	1.10	2.31	.82
好奇心が強い。	3.08	.64	3.16	.72
わがままである。	3.54	.66	> 2.84	.88 *
AC	2.73	.56	2.57	.77
何かするときなかなか踏ん切りがつかない。	2.62	1.04	2.84	.85
他人の顔色をうかがってしまう。	2.77	1.01	< 3.34	.75 *
要領が悪くおどおどしている。	2.38	.96	2.22	.79
挫折感を味わうことが多い。	2.69	.85	2.65	.91
遠慮がちで消極的である。	2.38	.77	2.59	.71

*...p<.05

4. 学校適応感と遅刻との関連性

学校適応感の尺度とのピアソンの相関係数を算出した（表8参照）ところ、授業場面での遅刻が規則への態度と $p<.01$ で負の相関（ $r=-.35$ ）があり、待ち合わせ場面での遅刻が友人関係と $p<.05$ で正の相関（ $r=.26$ ）があった。

遅刻群と非遅刻群間でt検定を行ったところ尺度においては有意差はなかった（表9参照）。項目においては「学校の規則を真面目に守っている／遅刻群（M2.23, SD.83）<非遅刻群（M2.91, SD.93）」「あまり意識しなくても規則を守れる方だ／遅刻群（M2.54, SD.88）<非遅刻群（M3.06, SD.72）」が $p<.05$ で遅刻群が低かった。

表8 学校適応感×遅刻

学校適応感 遅刻	友人	学習	進路	規則	適応感
授業	-.07	-.18	-.14	-.35**	-.24+
待ち合わせ	.28*	.05	.02	.08	.15

**...p<.01, *...p<.05, +...p<.10

表9 学校適応感の遅刻群と非遅刻群間の平均値と標準偏差

学校適応感の項目	遅刻群(N=13)		非遅刻群(N=32)		
	M	SD	M	SD	
〈友人関係〉	2.92	.67	2.76	.62	
ユーモアのある人間である。	2.84	.69	> 2.34	.79	+
人当たりがよく社交的な方である。	2.46	.97	2.57	.90	
多くの友人をこの学校に持っている。	3.17	1.11	2.78	.87	
性格的に明るい方である。	3.15	.99	3.19	.78	
悩みを聞いてくれたり、何でも話せる友人をこの学校に持っている。	3.15	.90	2.97	.93	
〈学習意欲〉	1.83	.75	1.85	.59	
勉強に積極的である。	1.77	.93	1.91	.96	
家庭学習を毎日時間を決めてやっている。	1.31	.48	1.34	.55	
授業をよく理解している。	2.00	.85	2.25	.72	
ある程度勉強ができる方だ。	2.00	1.00	2.16	.81	
勉強が楽しいと思う。	2.23	.93	> 1.78	.75	+
勉強の目的を持って毎日コツコツ努力している。	1.77	.93	1.69	.82	
〈進路意識〉	2.80	.84	2.81	.66	
自分にあった進路を考えている。	2.64	.92	2.88	.79	
自分の将来に希望を持っている。	2.67	1.07	2.74	.89	
自分の進路について、本や資料などでよく調べる。	2.23	1.01	2.16	.77	
自分の進路を真剣に考えている。	3.23	1.01	2.88	.91	
進路目標が明確である。	2.85	.99	2.75	.88	
将来なりたい職業を決めている。	2.92	1.04	3.34	.90	
〈規則への態度〉	2.60	.62	2.87	.54	
学校の規則を真面目に守っている。	2.23	.83	< 2.91	.93	*
あまり意識しなくても規則を守れる方だ。	2.54	.88	< 3.06	.72	*
規則を守らねばならないという自覚を持っている。	2.38	.87	2.72	.85	
学校の規則があるのは当たり前だと思う。	3.00	.82	3.00	.88	
規則に対して不満がない。	2.85	.99	2.66	.87	

*…p<.05, +…p<.10

【まとめと考察】

遅刻を絶対にしない者は、待ち合わせ場面よりも授業場面に多く、単位取得と関連していると考えられる。遅刻理由として「寝坊」「時間の逆算が甘い」「出かける直前に用事をはじめ」といった自分に関する要因、「相手がうるさくない」「必修の授業でない」という自分以外の外的要因があげられていた。遅刻は自分自身における内的要因、外的な環境要因が関与して

いることがわかる。

非遅刻群と比べて遅刻群は遅刻への罪悪感が低く、自分が遅刻しても「人間だからある程度仕方がない」と許容しやすい。また、遅刻群は頑固で融通がきかずわがままであり、思いやりが少なく、他者の表情を気にしない。大学においても規則を守りにくいと予想される。待ち合わせで遅刻する者ほど友人関係に適応感を持っており、親しさゆえに遅刻してしまうのかもしれない。

遅刻しやすい者は頑固で自分のペースが崩せず約束時間を優先した行動がとれない傾向にあり、それが遅刻の原因になっていると考える。また、遅刻しても人間だから仕方がないと許し、罪悪感も低いために遅刻が繰り返されるのであろう。遅刻者自身が自分の性格や行動パターンを認識し、他者への迷惑についても実感する必要があると考える。

【文 献】

- 伊谷実・杉村健 1994 保育学生の遅刻回数と教育実習評価との関係 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 472.
- 道城裕貴・松見淳子 2002 大学生の遅刻・欠席行動のアセスメント 日本行動分析学会第20回年次大会発表論文集, 32.
- 佐々木薫 1995a 出席及び遅刻に関する規範と集団の成績：吹奏楽部と洋弓部の調査研究 関西学院大学社会学部紀要 72, 13-24.
- 佐々木薫 1995b 出席及び遅刻に関する規範と集団の成績(2)：大学野球部の調査研究 関西学院大学社会学部紀要 73, 73-90.
- 清水義一・松浦直四郎 1974 学生実験における学生の遅刻および欠席状況と天候・気候との関係について 東海大学紀要学生生活研究所 4, 58-63.
- 清水義一・松浦直四郎 1975 学生実験における学生の遅刻および欠席状況と天候・気候との関係について—2— 東海大学紀要学生生活研究所, 103-109.
- 高橋克義・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文 1986 青年の環境移行と適応過程(1) 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 556-557.
- 巽葉子 1999 親と教師のカウンセリングルーム 腹痛を訴えて遅刻・欠席が目立ってきた子 児童心理 53 7, 702-707. 児童研究会編 金子書房.
- TEG研究会編 1991 TEG(東大式エゴグラム)活用マニュアル事例集 金子書房.